

ラビア・ムルエ

『表象なんかこわくない』

Rabih Mroué

Who's Afraid of Representation?

2022.10.2 Sun・4 Tue

愛知県芸術劇場 小ホール

Mini Theater, Aichi Prefectural Art Theater



STILL ALIVE
国際芸術祭
あいち2022

ラビア・ムルエの『表象なんかこわくない』

― 戦争の「表象」不可能性への挑戦

渡辺 真也（インディペンデント・キュレーター）

（インディペンデント・キュレーター）

（インディペンデント・キュレーター）

ラビア・ムルエのパフォーマンス・アート作品『表象なんかこわくない』には、歴史的パフォーマンス・アート作品が、あたかもレバノン内戦中に作られた作品であるかのように書き換えられ、引用されています。また、ここで参照されている作品が暴力と関係していて、女性作家たちから始まり男性作家たちに終わることに気づかされます。

ウィーン・アクションイズムを代表する**ヴァリー・エクスポート**（1940-) は《触る映画》(1968-71) にて、カーテンの下がったミニ映画館のような箱を胸に着け、観客に「手で」映画館に入るよう仕向けました。さらに《アクション・パンツ：生殖パニック》(1969) では、股間の空いたズボンを履いて性器を露出したままボルノ映画館を訪ねると、観客の目の前で股間を広げて見せたのです。エクスポートの作品では、男性からの暴力的眼差しに晒される女性が、男性へと視線を投げ返す存在へと移り変わります。

フランス人アーティストの**ジーナ・ペイン**（1939-1990）は《センチメンタル・アクション》(1973) にて、自分の体をつねる、殴る、切るなどのパフォーマンスを行いました。また**マリーナ・アブラモヴィッチ**（1946-) は《リズム0》(1974) にて、テーブルの上に薔薇、ナイフ、ムチ、装填されたピストルなどを並べて自身の身体を観客の手に委ねると、服を脱がされ、体を刺され、ついに銃口を向けられました。ペインの自傷を伴うパフォーマンスは、パリ5月革命とベトナム戦争から大きな影響を受けています。またバルチザン闘争の英雄を両親に持ち、社会主義国家ユーゴスラビアに生を受けたアブラモヴィッチは、同じ社会の構成員である観客へと自らの身体を預けた結果、その身を危険に晒すことになったのです。

ドイツ人アーティストの**ヨーゼフ・ボイス**（1921-86）は《私はアメリカが好き、アメリカも私が好き（コヨーテ）》(1974) にて、ドイツからニューヨークのJFK空港に到着すると、そこから救急車でギャラリーに運ばれ、コヨーテと数日暮らした後、再びドイツへと離陸しました。ここでボイスが述べる「アメリカ」とは、入植者たちがやって来る以前のアメリカのことです。ボイスは、先住民たちから聖なる存在として崇められていたコヨーテと暮らすことで、当時進行中だったベトナム戦争の背景に、ネイティブアメリカンの虐殺があることを浮かび上がらせました。

このようにパフォーマンス・アーティストたちは、自らの身体を用いて、暴力にさらされる他者の「痛み」を鑑賞者たちに伝えようと果敢に挑んできました。またラビア・ムルエは、レバノンにパフォーマンス・アートが成立しなかった理由について、宗教的コミュニティによって分断されたレバノンでは、個人という考え方が発達せず、個人の身体が、コミュニティにおける身体と対立するからだと考えました。

動物、卵、液体、ナイフなどを使って「痛み」を連想させる作品を多数制作し、**クリス・バーデン**（1946-2015）は《射撃》(1971) にて、ライフル銃を構えた友人に自身の左腕を撃たせ、さらに**ポール・マッカーシー**（1945-) は、イヴ・クラインの伝説的なパフォーマンス《空中浮遊》を模して2階の窓から飛び降りて、大怪我を負いました。

しかしなぜ、ラビア・ムルエはこれら暴力を扱ったパフォーマンス・アートの歴史を参照したのでしょうか？ここで重要になってくるのは、この作品『表象なんかこわくない』は、彼が体験したレバノン内戦をいかに「表象」するのがテーマになっている、ということです。

そもそも「表象」とは、外界にある対象を知覚することによって得る内的な対象のことです。バーデンの《射撃》を例にとると、人が撃たれる様子（外界にある対象）を見た観客たちが、内的な対象として得たものが表象となります。

アーティストが自らの身体を用いた表現をすることで、目の前にいる鑑賞者たちの感情移入を促すパフォーマンス・アートには、主体と客体の入れ替わりを実現し、鑑賞者に他者性を認識させやすくするという特徴があります。自傷するパフォーマンスを行ったジーナ・ペインは、自身の苦しみに感情移入して感動するという「実体験」を観客に呼び起こしたかったと語っており、またクリス・バーデンは、「撃たれた」というテレビ報道があった際、それが実際にどのような感じなのかを知りたくて《射撃》を行ったと語っています。

このようにパフォーマンス・アーティストたちは、自らの身体を用いて、暴力にさらされる他者の「痛み」を鑑賞者たちに伝えようと果敢に挑んできました。またラビア・ムルエは、レバノンにパフォーマンス・アートが成立しなかった理由について、宗教的コミュニティによって分断されたレバノンでは、個人という考え方が発達せず、個人の身体が、コミュニティにおける身体と対立するからだと考えました。

動物、卵、液体、ナイフなどを使って「痛み」を連想させる作品を多数制作し、**クリス・バーデン**（1946-2015）は《射撃》(1971) にて、ライフル銃を構えた友人に自身の左腕を撃たせ、さらに**ポール・マッカーシー**（1945-) は、イヴ・クラインの伝説的なパフォーマンス《空中浮遊》を模して2階の窓から飛び降りて、大怪我を負いました。

しかしなぜ、ラビア・ムルエはこれら暴力を扱ったパフォーマンス・アートの歴史を参照したのでしょうか？ここで重要になってくるのは、この作品『表象なんかこわくない』は、彼が体験したレバノン内戦をいかに「表象」するのがテーマになっている、ということです。

そもそも「表象」とは、外界にある対象を知覚することによって得る内的な対象のことです。バーデンの《射撃》を例にとると、人が撃たれる様子（外界にある対象）を見た観客たちが、内的な対象として得たものが表象となります。

アーティストが自らの身体を用いた表現をすることで、目の前にいる鑑賞者たちの感情移入を促すパフォーマンス・アートには、主体と客体の入れ替わりを実現し、鑑賞者に他者性を認識させやすくするという特徴があります。自傷するパフォーマンスを行ったジーナ・ペインは、自身の苦しみに感情移入して感動するという「実体験」を観客に呼び起こしたかったと語っており、またクリス・バーデンは、「撃たれた」というテレビ報道があった際、それが実際にどのような感じなのかを知りたくて《射撃》を行ったと語っています。

このようにパフォーマンス・アーティストたちは、自らの身体を用いて、暴力にさらされる他者の「痛み」を鑑賞者たちに伝えようと果敢に挑んできました。またラビア・ムルエは、レバノンにパフォーマンス・アートが成立しなかった理由について、宗教的コミュニティによって分断されたレバノンでは、個人という考え方が発達せず、個人の身体が、コミュニティにおける身体と対立するからだと考えました。

一方、戦争という暴力は、しばしば「表象」不可能とされます。なぜなら、戦争の最大の当事者かつ被害者とは、痛みを感じることのできる私たち「生者」ではなく、痛み

を感じることさえできなくなった「死者」たちだからです。つまり戦争という暴力の当事者となった「死者」たちを、「生きる」アーティストたちが表現することは困難で、かつ「生きる」鑑賞者たちも、目の前の「生きる」パフォーマンス・アーティストという他者の「痛み」を追体験することはできても、私たちにとって最大の他者となった「死者」たちが体験した、「痛み」を通り越した「死」を追体験することはできないのです。

ラビア・ムルエは、戦争の表象不可能性という問題を十分に理解した上で、レバノン内戦という長年に渡る戦争という暴力の現実を伝えるためにも、「痛み」を扱った歴史的パフォーマンス・アート作品を参照しつつ、その歴史性と「死」について、果敢にも表現を試みたのです。女性のエロスから始まり、男性のタナトスで幕を閉じるこの作品の中で、亡霊のように積み重なっていく死せる女性のイメージは、あたかもレバノン内戦や、ベイルートでの大量殺人事件で亡くなった死者たちの姿であるかのようです。

タイトル『表象なんかこわくない』に込められた意味



この作品のタイトル『表象なんかこわくない（Who’s Afraid of Representation?）』は、エドワード・オールビーの演劇作品『バージニア・ウルフなんかこわくない（Who’s Afraid of Virginia Woolf?）』からの引用です。

『バージニア・ウルフなんかこわくない』では、ディズニー映画『三匹の子ぶた』のテーマソング『狼なんかこわくない（Who’s Afraid of the Big Bad Wolf）』の「ビッグ・バッド・ウルフ」の箇所が「バージニア・ウルフ」へと替えられ、劇中で何度も歌われます。またグリム童話の『三匹の子ぶた』は、豚を食べてしまう悪い狼が、最後には豚に食べられてしまう、という善悪の入れ替わる構造になっています。この映画が公開された1933年はナチスが政権を奪取した年でもあることから、「狼なんかこわくない」には、第二次世界大戦中、自らの正義を掲げて戦う各国の政治家を揶揄する目的で歌われた歴史もあります。

オールビーは、壮絶な夫婦喧嘩を繰り広げる主人公のジョージとマーサに、アメリカ初代大統領のジョージ・ワシントンとその妻マーサを、さらに彼らを訪問して言い争いを始めるニックに、ソ連の最高指導者ニキータ・フルシ

チョフを重ねることで、キューバ・ミサイル危機におけるアメリカ世論の分裂と、自己正当化を図ろうとするアメリカとソ連を批判しました。

こうした歴史と構造を踏まえてつくられたのが、レバノン内戦の歴史を背負ったラビア・ムルエ演じる男性ハッサンが、パートナーの女性リナ・サーネーが朗読するパフォーマンス・アート史の物語に、あたかも悪い狼のように闖入してくる『表象なんかこわくない（Who’s Afraid of Representation?）』です。すると舞台上のムルエとサーネーが、あたかも「狼」と、食べられてしまう「赤ずきん」に見えてくるのは、果たして私だけでしょうか？

もっと知りたい方はこちら	
PAチャンネル「パフォーマンス・アート史なんかこわくない」講師：渡辺真也　聞き手：相馬千秋 <p>https://youtu.be/_zbnvxzhxko</p>	

渡辺真也
 <p>ニューヨーク大学大学院シュタイナート教育学部修士課程修了後、アートキュレーターとして国民国家に焦点を当てた国際美術展をアメリカ、スイス、ドイツ、日本などで開催。ベルリン技術経済大学造形文化学部で4年間教鞭を執る傍ら、「ユーラシアを探して: ヨーゼフ・ボイスとナムジュン・パイク」にてベルリン芸術大学造形学部で博士課程修了。美術史博士。テンプル大学講師。</p>

レバノン出身で、ベルリンを拠点に活動するアーティスト、ラビア・ムルエ。過去30年にわたり、中東アラブ世界の混乱と歴史の空白をラディカルに批評する作家の一人として、数多くの舞台作品やレクチャーパフォーマンス、映像作品等を発表し続けてきた。共同体の歴史と個人の物語、虚構と現実の境界線上で戯れる作品群は、これまでドクメンタ13やミュンヘン・カンマーシュピールをはじめ、世界の主要な国際展や劇場、美術館で制作・発表され、また日本でも2004年の初来日以来、『BIOKHRAPHIAーピオハラフィア』（2002）、「これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』（2007）、『歓喜の歌』（2015）などの代表作とともに6度の来日公演を重ねている。

（インディペンデント・キュレーター）

（インディペンデント・キュレーター）

ムルエは今回、「あいち2022」のテーマに応答し、パフォーマンス・アート史を題材にした代表作『表象なんかこわくない（Who’s Afraid of Representation?）』（2005、ベイルート初演）を17年の時を経てアップデート上演する。シンプルな舞台上では、パフォーマンス・アート史の文献を開くパフォーマンスが、そのページを綴った伝説的パフォーマンス・アーティスト、例えばヴァリー・エクスポート、マリーナ・アブラモヴィッチ、クリス・バーデンらになり代わって語り始める。だが、ボディ・アート史に残る自傷的アクションを語るはずの言葉は、1975年から15年間続いたレバノン内戦に搦め捕られていき、どこまでがアーティスト本人の手によるテキストか、判然としない。そこにムルエは、2002年に実際にベイルートで起こった大量殺人事件の犯人の語りを併置していく。史実では交わることなかったパフォーマンス・アート史とレバノン現代史が、皮肉にも暴力を媒介にフィクショナルに交差する「歴史の再演／リエナクトメント」を前に、私たちは震撼せずにはいられない。

For the past 30 years, Berlin-based Lebanese artist Rabih Mroué has been creating numerous performances, video works and lectures that radically critique the chaos and historical vacuum of today’s Middle Eastern Arab world. His works, which take place on the boundaries between fiction and truth, communal history and personal anecdote, have been presented at festivals such as dOCUMENTA(13) and the Munich Kammerspiele as well as major international theaters and museums around the world. Mroué has given six performances in Japan since his first visit in 2004, including his major works *Biokhraphia* (2002), *How Nancy Wished That Everything Was an April Fool’s Joke* (2007), and *Ode To Joy* (2015).

（インディペンデント・キュレーター）

For the Aichi Triennale 2022, Mroué takes inspiration from the theme “STILL ALIVE” to present a daring recreation of his masterpiece *Who’s Afraid of Representation* (2005), which itself engages with the history of performance art. Set on an artless stage, the performer opens a book on the history of performance art and transforms into the figures who defined its pages, among them legends like Valerie Export, Marina Abramovic and Chris Burden. However, the parts supposed to describe the self-harming actions from the history of body art are intertwined with words about the Lebanese Civil War between 1975 and 1990, blurring the extent of the artist’s own involvement in the text. Further, Mroué weaves in a narrative about the perpetrator of a mass murder that took place in Beirut in 2002. As this historical reenactment ironically and fictionally intersects the history of performance art with the history of contemporary Lebanon through the medium of violence, we as the audience cannot help but listen, watch, and be shaken.



Photo: Houssam Mchaimch

ラビア・ムルエ

1967年ベイルート（レバノン）生まれ
ベルリン（ドイツ）拠点

俳優、演出家、脚本家。今日の中東アラブ世界の混迷と希望をもっともラディカルに表象するアーティストの一人。身体、映像など多様なメディアを用いて虚構と現実の境界を揺さぶりながら今日の問いを浮かび上がらせる。2010年、スポルディング・グレイ賞受賞。2011年、プリンス・クラウス賞受賞。2015年よりミュンヘン・カンマーシュピーレのレジデント・アーティスト。日本では、2004年および2007年東京国際芸術祭（TIF）、2009年・2013年フェスティバル/トーキョー（F/T）、2019年シアター commons等での招聘で公演を重ねる。ベイルート・アート・センター協会の設立者であり、理事を務める。『TDR:The Drama Review』（ニューヨーク）編集者としても活動。

Rabih Mroué

Born 1967 in Beirut, Lebanon
Based in Berlin, Germany

Rabih Mroué is an actor, director, and playwright, as well as an artist offering some of the most radical depictions of the chaos and hopes of the contemporary Middle East. Blurring the line between truth and fiction, he brings a number of contemporary concerns to light in a diverse range of media, including video and the body. He was given the Spalding Gray Award in 2010 and the Prince Claus Award in 2011, and has been a resident artist at Munich Kammerspiele since 2015. With his invitations to Tokyo International Festival in 2004 and 2007, to the Festival/Tokyo in 2009 and 2013, and to the Theater Commons Tokyo in 2019, Mroué has performed numerous times in Japan. He is also a co-founder and a board member of the Beirut Art Center (BAC) and a contributing editor for The Drama Review (TDR), New York.

主な作品発表・受賞歴

- 2019 『Borborygmus』 Home Works Forum 8、ベイルート（レバノン）
- 2012 ドクメンタ（13）、カッセル（ドイツ）
- 2009 『フォト・ロマンス』 アヴィニョン演劇祭、アヴィニョン（フランス）
- 2007 『これがぜんぶエイプリルフールだったなら、とナンシーは』 東京国際芸術祭、東京
- 2002 『BIOKHRAPHIAーピオハラフィア』、ベイルート（レバノン）

Selected Works & Awards

- 2019 *Borborygmus*, Home Works Forum 8, Beirut, Lebanon
- 2012 dOCUMENTA (13), Kassel, Germany
- 2009 *Photo-Romance*, Festival d'Avignon, Avignon, France
- 2007 *How Nancy Wished That Everything What happened to April Fool's Joke*, Tokyo International Arts Festival, Tokyo, Japan
- 2002 *Biokhraphia*, Beirut, Lebanon

演出・脚本：ラビア・ムルエ

Direction & Script: Rabih Mroué

出演：リナ・マジダラニ
ラビア・ムルエ

Performers: Lina Majdalanie
Rabih Mroué

美術：サマル・マーカルン
技術監督：トーマス・コペル
制作補助・字幕操作：ラシャ・エル グラビ
字幕翻訳（英語）：リナ・ムンザー

Set designer: Samar Maakaroun
Technical director: Thomas Köppel
Production assistant, Surttitle operation: Racha El Gharbie
Surtitles Translation (English): Lina Mounzer

製作：レバノン現代芸術協会（アシュカル・アルワン）
ベルリン HAU 劇場
ジューメンス・アート・プログラム、ドイツ
フランス国立ダンスセンター
協力：タンツクォーター・ウィーン（TQW）

Produced by:
The Lebanese Association for Plastic Arts (Ashkal Alwan), Beirut
Hebbel Theater, Berlin
Siemens Art Program, Germany
Centre National de la Danse, Paris
With the Support of TQW, Vienna

字幕翻訳（日本語）：山田カイル（Art Translators Collective / 抗原劇場）

Surtitles Translation (Japanese): Yamada Kyle (Art Translators Collective/AIergen Theatre)

舞台監督：川上大二郎
照明：吉田一弥
音響：稲荷森健
映像技術：山田晋平（株式会社青空）

Stage Manager: Kawakami Daijiro
Lighting designer: Yoshida Kazuya
Sound designer: Inarimori Takeshi
Video Engineer: Yamada Shimpei (AOZORA, LTD.)

記録映像：株式会社青空
記録写真：今井隆之

Video Documentation: AOZORA, LTD.
Photography: Imai Takayuki

キュレーター：相馬千秋（国際芸術祭「あいち2022」）
制作：谷口裕子（国際芸術祭「あいち2022」）

Curator: Soma Chiaki (Aichi Triennale 2022)
Production Coordinator: Taniguchi Yuko (Aichi Triennale 2022)

主催：国際芸術祭「あいち2022」組織委員会
共催：愛知県芸術劇場

Presented by Aichi Triennale Organizing Committee
Co-presented by Aichi Prefectural Art Theater

文化庁「ARTS for the future! 2」補助対象事業

STILL ALIVE 国際芸術祭 あいち2022



国際芸術祭「あいち2022」
パフォーミングアーツ

アドバイザー：藤井明子、前田圭蔵
キュレーター：相馬千秋

AICHI TRIENNALE 2022
Performing Arts

Adviser: Fujii Akiko, Maeda Keizo
Curator: Soma Chiaki

プロダクションマネージャー：清水翼
コーディネーター：村松里実、谷口裕子、芝田遥、菅井一輝

Production Manager: Shimizu Tsubasa
Coordinator: Muramatsu Satomi, Taniguchi Yuko
Shibata Haruka, Sugai Kazuki
Technical Coordinator: Ozaki So

テクニカル・コーディネーター：尾崎聡

Ticket Administration: Comori Aya (bench Co.)

票券：小森あや (bench Co.)

翻訳：ロバート・ツェツシェ
編集：鈴木理映子
デザイン：山口良太

Translation: Robert Zetzsche
Editor: Suzuki Rieko
Designer: Yamaguchi Ryota

PAチャンネル



各作品の背景についてのレクチャー、参加アーティストによるトークなど、パフォーミングアーツ・プログラムを多面的に体験するためのオンラインコンテンツです。

2022年7月30日|土|— 10月10日|月・祝|[73日間]

芸術監督：片岡 真実（森美術館館長、国際美術館会議（CIMAM）会長）

主催：国際芸術祭「あいち」組織委員会

助成：一般財団法人地域創造

愛知県政150周年記念事業

AICHI TRIENNALE 2022: STILL ALIVE

July 30 (Saturday) to October 10 (Monday, public holiday), 2022

Artistic Director: Kataoka Mami (Director, Mori Art Museum/President, CIMAM)

Organized by Aichi Triennale Organizing Committee

Supported by Japan Foundation for Regional Art-Activities

